慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	T. M. L. Wigley, M. J. Ingram and G. Farmer (ed.), Climate and history, studies in past climates and their impact on Man
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.56, No.1 (1986. 7) ,p.85- 91
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19860700-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

T. M. L. Wigley, M. J. Ingram and G. Farmer (ed.);

Climate and History, Studies in past climates and their impact on Man.

Pp. XII+530.

Cambridge University Press, Cambridge 1981
(Paperback edition 1985, ISBN 0521312205
£. 15. 00).

真下英信

本書は The Climate Research Unit の設立者でもあり初代会長でもある H. H. Lamb の発案に従って一九七九年七月 East Anglia 大学で「気候と歴史」をテーマに開催された大会での報告を基に編纂されたものである。序文によると、当大会には三十か国以上から二五十人程出席し、六十五を超える発表がなされた。これらの内から総計三十七人の執筆者による二十の論文に序論を付したものが本書で、全体は四部からなる。各論題は次の通りである。

I INTRODUCTION 1

1 Past climates and their impact on Man: a review
M. J. INGRAM, G. FARMER AND T. M. L. WIGLEY 3

II RECONSTRUCTION OF PAST CLIMATES 51

2 The use of stable-isotope data in climate reconstruction
J. GRAY 53

3 Glaciological evidence of Holocene climatic change
S. C. PORTER 82

4 The use of pollen analysis in the reconstruction of past climates: a review
H. J. B. BIRKS 111

5 Reconstructing seasonal to century time scale variations in climate from tree-ring evidence
H. C. FRITTS, G. R. LOFGREN AND G. A. GORDON 139

6 Archaeological evidence for climatic change during the last 5000 years
R. McGHEE 162

7 The use of documentary sources for the study of past climates

M. J. INGRAM, D. J. UNDERHILL AND G. FARMER 180
8 An analysis of the Little Ice Age climate in Switzerland and its consequences for agricultural production
C. PFISTER 214
9 The historical climatology of Africa
S. E. NICHOLSON 249
10 Drought and floods in China, 1470–1979
WANG SHAO-WU AND ZHAO ZONG-CI 271

III TOWARDS A THEORY OF CLIMATE HISTORY INTERACTIONS 289
11 An approach to the study of the development of climate and its impact in human affairs
H. H. LAMB 291
12 Short-term climatic fluctuations and their economic role
H. FLOHN 310
13 Climatic change and the agricultural frontier: a research strategy
M. L. PARRY 319
14 History and climate: some economic models
J. L. ANDERSON 337
15 Climate and popular unrest in late medieval Castile
A. MACKAY 356

IV CLIMATE-HISTORY INTERACTIONS: SOME CASE STUDIES 377
16 Climate, environment, and history: the case of Roman North Africa
B. D. SHAW 379
17 The economics of extinction in Norse Greenland
T. H. McGOVERN 404
18 Weather and the peasantry of Upper Brittany, 1780–1789
D. M. G. SUTHERLAND 434
19 Climatic stress and Maine agriculture, 1785–1885
D. C. SMITH, H. W. BORNS, W. R. BARON AND A. E. BRIDGES 450
20 Droughts in India over the last 200 years, their socioeconomic impacts and remedial measures for them
D. A. MOOLEY AND G. B. PANT 465

以上の章題から分かるように、本書の目的は過去の気候とその変動の実態の解明ならびにその人間社会への影響の考察にある。これまでにも気候と人間との関係は古代ではヒッポクラテス、近世ではモンテスキュー以来幾多の人々の関心を引き付けて来たが、従来は E. Huntington に代表される気候が人間文化の発達と衰退を制約するかの如き気候決定論的な見解が強く (e. g. *Civilisation and Climate*, New Haven 1915; 間崎万里訳『気候と文明』一九八五（一九三八）、岩波文庫）、その実証性の欠如故にもっぱら批判的に扱われるにすぎなかった。取り分け歴史家は、評者が関心を持っている領域に限定してではあるが、この問題に余り注目してこなかった。M. Rostovtzeff のローマ史（*The Social and Economic History of the Roman Empire*, 2 ed. Oxford 1957）でも H. Bengtson のギリシア史（*Griechische Geschichte*, 3 ed. München 1965）でも気候的要因は全く考慮されていない。

しかるに特に第二次世界大戦後地球的な規模での工業化の進展と人口増加に伴い、炭酸ガスの増加と気象の関係、異常気象の発生原因等の諸問題が改めて人々の耳目をひくようになった。穀物不足に象徴される異常気象の農業への影響は、今日単に経済的のみならず政治的にも大問題になっている事は周知の事実である。本来ならば人間に役立つべき科学技術の発達が却って社会の環境変化に対する脆弱性を高めているのである。本書にみられる諸研究がなされている背景にはこうした現代社会が当面している問題が横たわっていると思われる。

かかる時代にあって本書の執筆者達は改めて過去の気候をより精緻な方法で確認し、より包括的な理論でもって気候変動と社会の変化という極めて錯綜した関連を解明しようとしている。彼等の多くは従来と異なり、人間が気候変動に対して受動的に係わるのみではなく、むしろ積極的に能動的に対処していく点を強調している。また、これまでにもエジプト、ミケーネ、インダスなどの諸文明が気候変動のために崩壊したとの見解が出されているが、本書ではこうした安易な気候決定論は退けられており、全体に慎重な態度が貫かれている。

我々歴史家は気候変動の研究の詳細な専門的知識を持つ必要はないかもしれないが、人間も地球に生存する一生物にすぎず、人間の歴史にとって気候はやはり無視出来ぬ一要因であるならば、現代の気候学者が気候変動と社会との関係について如何なる成果を上げているかは正確に学んでおかねばなるまい。本書はこうした必要性に充分答え得る有益な書である。

次に本書の内容を簡単に紹介しておこう。

第一部の序論は過去の気候の解明と気候の社会への影響を考

察するにあたって生じる諸問題を再検討する。初めに過去の気候を知る手段を検討する。温度計などの計器による気象資料が入手出来る近世は問題ないが、花粉や年輪の研究、氷河の調査、同位元素の利用などの科学的方法に加えて、考古学的資料や文献資料からも過去の気候を推測出来る。しかし、いずれの方法も単独では極めて不確実である。だが、これらの種々の方法を綜合的に判断することによって過去五千年間の気候について妥当な結論を出し得る。

次に、気候の社会への影響を検討する。当問題の研究状況を批判的に論じながら取るべき方法を論じる。複雑で多岐に亘る要因が絡んでいる故に、慎重な考察がなされている。最後に、従来無視されて来た人間の気候変動への適応行動を論じる。なお、些細な事かも知れぬが、二年連続の不作の影響の可能性は一年の不作の二倍以上に大きいことがあり得るとの指摘(p. 13)は我々の忘れやすい所であろう。

第二部は過去の気候を推測する種々の手段の事例研究である。同位元素（二章）、氷河の調査（三章）、花粉研究（四章）、年輪学（五章）によって過去の気候を論じる。いずれの研究者も前提、測定誤差、解釈の可能性など、各々の専門分野に個有の問題点を明確に自覚し、ジャーナリスティックな態度を取っていない点は我々も学び取るべきであろう。

第六章は定住地の放棄などの考古学的資料から過去の気候を検討する。過去五千年間に多少の気候変動はあったが、基本的には不変である。むしろ、人間自身が環境を変える主要因になっているとの見解が提出されている。従って、幾つかの古代文明が気候変動故に衰退したとの見解は退けられており、気候変動と文明の盛衰の因果関係については性急な関係付けを戒めている。

評者が関心を持っている古代ギリシア世界について一言すれば、ミケーネ文明の崩壊原因は地中海世界の気候変動にあるとの見解（R. Carpenter, *Discontinuity in Greek Civilization*, Cambridge 1966; R. A. Bryson, T. J. Murray, *Climates of Hunger*, Madison 1977）には懐疑的である。因に、古代ギリシア史の代表的概説書である *CAH* (2 ed. Vol. II.2 p. 660, Cambridge 1975) もミケーネ文明の崩壊原因を気候に帰す説は根拠ないとしている。

第七章では、資料の批判と分析から過去の気候を知ることが極めて難しく、限界はあるが、慎重に行なえばそれなりの成果が期待出来ることが示される。ここでの資料分析は歴史学での史料批判に通じる面があり、学ぶ所が多かろう。

第八章から第十章は、資料から過去の気候を知る方法の事例研究としてスイス、アフリカ、中国が扱われている。まず八章では公文書、日記、ブドーの収穫期や生産高、降雪量などの可能な限りの資料をコンピューターで処理する外に、同位元素、年輪の研究などの科学的調査を加味しながら西暦一五二五年から一八二五年の過去三百年のスイスの気候を検討している。気候変動の社会の影響について、多少の不作が生じてもその社会は外国から食料を輸入したりして事態に対処していく社会の強

靱な適応力が指摘されている。

第九章は過去三百年間のアフリカの気候を検討する。南アフリカとスーダン地方の気候変化が相互に関連しているが、これは熱帯収束帯（ITCZ）の変動に起因し、地球規模での大気循環の変化に関連している事実が指摘される。第十章は文献資料から、過去五百年間の中国での洪水、干ばつもやはり地球規模の大気循環に応じて発生していることが示される。

第三部は気候変化の社会への影響を論じる。まず、第十一章はヨーロッパを中心に過去千年の気候動態を調べる。廃村、洪水などには気候変動の影響が認められる。これらの考察から今日の問題として、農業技術は向上したが農業が単一作物に偏している危険性が指摘されている。

第十二章は穀物価格の変動から、気候の短期的変動が如何なる社会的経済的影響を与えるかを論じる。長期にわたる小規模な気候変動がしばしば急激な大変動と重なって相乗作用的に社会的影響を大きくする。しかも、かかる急変は地球規模の大気循環と関連しているが故に、広範囲に発生する“telecon-nections”なる現象が認められる。

第十三章では気候変動の経済への影響を知るための理論的な考察がなされる。従来この問題は、単に時空的同時性のみで解釈される傾向にあった。しかし、気候と経済の因果関係には複雑な諸要因が絡み合っており、こうした単純な解釈では不充分である。それ故、著者は気候学と経済史家間の方法論的対立を解消すべく、従来の方法より厳密な“retrodictive”なる方法を提案し、中世英国の農業をテストケースにして研究している。気候学者として、M.M.Postan の見解の問題点を指摘した所もあり面白い。歴史に関心を持つ人には本書中で最も有益な一章であろう。

第十四章。ヨーロッパ史でも、ヴァイキングの侵入、中世末期や近世初期の危機など気候の変動に起因するとの説明がなされている事件がある。著者はこれらの事件の原因として気候変動を主張出来る根拠は何もないとし、両者の因果関係の決定が如何に難かしいかを論じている。中世史に関心ある人には有益な論考であろう。

第十五章は中世末の Castile 地方の気候変動と暴動の関係を論じる。両者の関係は認められるが、刺激に対して反応と言う単純な発想ではこれらの暴動を決して理解出来ない。問題は、現代人にとって不合理とも見える事件を通して如何に文化的にも宗教的にも中世的なものを我々が解明するかにある。史料をどう読むことが出来るか、教えられる所が本章には多かった。

第四部は人間が気候変動に対して単に受動的な態度に終始するのではなく、積極的に対処していく事実を成功例失敗例を含めて検討する。すでに述べた如く、気候への人間の能動的対処という視点から問題を促えている所が本書の大きな特徴となっている。

第十六章。今日不毛の北アフリカは古代ローマ帝国の支配下ではローマの穀倉地として有名であった。この神話がローマ帝

国以後北アフリカの気候が変化したとする説の根拠になっている。著者によれば、北アフリカの気候変化説は誤った資料に基づく誤解である。勿論、僅かの変化はあったが、数量的に検証出来る動物相、水利、地力を検討する限り基本的に今日のアフリカの気候はローマ時代のそれと異ならない。古代世界では、穀物輸出を考えた時、かならずしも高い生産力、生産性を前提にしなくとも良いとの指摘は注目に価する。古代地中海世界の穀物市場に関心ある人は本章を一読する必要があろう。

第十七章。ノルウェー人のグリーンランド植民（九八五―一五〇〇）の失敗は気候の寒冷化に起因するとみるのが通説である。しかし、本章の著者によれば、真因はむしろ社会の気候変動への適応の失敗にある。彼等は気候の変化に即して代替資源の利用もせず、より有効なエスキモー人の技術（舟、衣服等）の採用をも怠り、従前の生活形態に固執した。では、固執原因は何か。情報理論を基に多面的な考察がなされている。その詳細は省略するが、簡単に言えば少数エリートの支配に起因する〝自己神話化〟にある。概念的に余り明確ではないが、支配者の〝自己神話化〟とか〝合理的判断の必要〟とか極めて注目すべき発想があり、評者が本書の中で最も興味を覚えた一章である。

第十八章は仏革命前の一七八〇年代の Brittany 地方の農村を対象に社会と気候変動の関連を論じる。当時のフランス史に関心を持つ人には必読の一章である。フランスでは十七世紀以来気候と社会変化の関係が指摘されており、一七八〇年代でも不作と暴動の関連が云々されている。しかし、Brittany 地方の農村社会を調べてみると、不作は必ずしも社会的動揺に直結していない。なぜそうなのか、関心ある人は本章を読んでいただきたい（p. 446-448）。平凡ではあるが、あるべき社会の姿を考えた時面白い指摘がなされていると同時に、農村は環境変化を単に甘受したのではなく変化に対処して種々の処置を講じていた事実が指摘されている。これは、例えば不作による暴動は気候と言う外的な変化よりも社会の内部の歪が重視されるべきことを教示していると言える。

続く第十九、二十章では、百年、二百年と言う短期間ではあるが、インド、アメリカの事例研究を踏まえて、人間が気候の害を受けながらも積極的に変化に対処していく姿をえがいている。

第二十一章は Sahel-Sudan 地方、Tigris-Euphrates 地方、そしてアメリカの Great Plains の気候を検討しながら二つの仮説、〝緩和の仮説〟（百年以内の周期の小規模の気候変動に対して、社会はその影響を減じることが出来る）と〝破壊の仮説〟（百年以上の長期の変動に対しては、短期の変動に対して取られた処置が社会の脆弱性を強める）が検討される。メソポタミアの古代文明の衰退原因を気候変動にのみ求めるのは正しくない。むしろ政治的社会的な不安定さ、技術革新の欠如に気候の変動がある程度加わると言う諸要因の結合の結果である。本章を読むと、例えばアフリカの食料不足は単に食料を送れば済むものではなく、海外援助が極めて多難の問題を抱えている

ことが理解出来よう。

以上の内容紹介から分かる如くに、各章は全く独立しており通読しなくても理解出来る。索引も完備しており、参考文献も各章ごとによく記載されておりすこぶる便利である。なお、本書の成立の契機になった前述の大会にはロックフェラー財団の援助を中心に英米仏の諸機関から多大の協賛を受けた旨の謝辞が述べられているが、常日頃経済大国を自任して止まぬ日本の名は見当たらないことを記しておく。

最後になったが、本書を読むに当たり評者の専門外で不明な所を親切に説明して下さった職場の同僚でもあり畏友でもある梅岡記容子教諭と国府方久史教諭に厚く御礼を申し上げる次第である。

(86. II. 16)

三宅和郎著

『記紀神話の成立』

関　和彦

一　はじめに

慶応大学出身の新進古代史家・三宅和郎氏が記紀神話論を古代史研究選書の一冊として公にされた、古代史研究選書は「最近の地道な研究成果を盛りこみつつ、新たな地平を展望」するため、「学界で注目」された「気鋭の研究者による清新な眼で」の一書を目指したものである。

記紀神話論において続々と論文を発表して新たなる見解を提示されてきた三宅氏が当該分野を担当されたことは学界において誠に適切であったと思う。その意欲的な論著の書評を依頼されたことは誠に光栄であるが、一方においてその責を全うできるかどうか一抹の不安もある。それは根本的には学部以来十年余の間、主体的に記紀神話研究に携わってこられたその成果を、記紀神話には概して傍観者的立場でしかなかった者が書評するところに起因している。

私としては、今から記紀神話研究の既往の成果を消化して、その全体像の中で云々という方法をとることは不可能であるので、三宅氏の著書だけに限定して、その内側から記紀神話研究をみていく方法しか持ちあわせないのである。氏をはじめとし、この書評を目にする方々に満足していただくには程遠い内容となろうが、現状の私の研究の反映とお考えいただき、お許しを願いたいと思う。

二　著書の構成

まず最初に著書の構成を簡単に紹介しておこう。

第一　記紀神話の成立――課題と方法――

第二　神代紀の基礎的考察

第三　天岩戸神話

第四　海幸山幸神話

第五　神武東征伝承